

戦後フランスにおける情報秩序の再構築に 関する予備考察 (3)

——CGE（総合検討委員会）による情報部門の改革案をめぐって——

国際教養学部 中 村 督

はじめに

解放期、「カイエ・ブルー」(Cahier bleu) と呼ばれる文書を基に複数のオルドナンスが発行され、情報に関する法制度が整備されていった。ここでいう「情報」とは、通信社、プレス（新聞・雑誌）、ラジオ、映画、宣伝のことを指す。そのなかでも重要な位置を占めたのが新聞であり、この時期の当該領域における課題は、基本的には新聞改革をどのように進めるかであった。ナチス・ドイツの占領下のフランスにあって、新聞・雑誌は発行停止をするか対独協力に転向するかしか選択肢がなく、解放後は白紙の状態からジャーナリズムを建て直す必要があった。その一方で、新聞改革の当事者たちは、第二次世界大戦前の問題、すなわち新聞と金銭権力との癒着というジャーナリズム界に重くのしかかった問題を記憶していた。彼らからすれば、大戦間期における新聞界の腐敗が前提となって、占領下で多くの新聞が対独協力に転向したという論理が成立していたのである。それゆえ、「カイエ・ブルー」には、新聞が金銭権力との関係を断ち切ることと対独協力新聞の処遇—制裁 (sanction) という言葉が用いられる—とが同時に記されることになった。前々稿では、「カイエ・ブルー」の概要を紹介するとともに、それが起草された背景を論じた。そのうえで、前稿では、ジャン・モットン『プレスの政治史1944-1947年 (*Histoire politique de la presse 1944-1949*)』を参考にして、1944年から47年にかけて新聞の党派性がどのように変化したのかを分析した¹。

本稿では、時代を遡って、占領下のフランスで新聞改革がどのように構想されていたのかを考察したい。前々稿で指摘したように、「カイエ・ブルー」は、占領期にフランシス・ゲイが書いた『新聞改革の諸要素 (*Éléments d'une politique de presse*)』

1 前稿と前々稿はそれぞれ以下。中村督「戦後フランスにおける情報秩序の再構築に関する予備考察 (1) —「カイエ・ブルー」に着目して」、『南山大学ヨーロッパ研究センター報』、第20号、2014年、35-50頁；同「戦後フランスにおける情報秩序の再構築に関する予備考察 (2) —新聞の党派性とその変化」、『南山大学ヨーロッパ研究センター報』、第21号、2015年、27-39頁。

を原案としている。ここで確認しておきたいのは、ゲイは戦前から編集者やジャーナリストとして名を馳せていたという事実である。ゲイは、1909年に出版社のブルー（Bloud）に雇われ、そこで頭角を現し、多くの宗教色の強い出版物を世に出すことになる（ちなみにこの出版社は、彼の名を入れたブルー・エ・ゲイ（Bloud et Gay）という名前に変わる）。彼は、1919年に『アルマナ・カトリック（*Almanach catholique*）』、24年に『ラ・ヴィ・カトリック（*La Vie Catholique*）』を創刊するが、とくに後者を「宗派性のちがいを超えて」、すべてのカトリックの集団に開かれた雑誌として位置づけている。その後、1932年に、彼はキリスト教の思想に基づいた民主主義の普及に向けた新聞『ローブ（*L'Aube*）』を創刊する。つまり、ゲイという人物は、キリスト教関係の出版物に限定されるとはいえ、職業編集者であり、『新聞改革の諸要素』のような改革案を書けるだけの知識や思想を有していたのである²。

しかし、占領下のフランスにあって、ゲイの『新聞改革の諸要素』のほかにも新聞改革の構想があったのではないか、あるいは、そうでなくとも彼の思想や「カイエ・ブルー」に影響を与えた要素があったのではないかと仮定することはできるだろう。そこで本稿は、総合検討委員会（Comité général d'études、以下CGEと略記）による解放後の新聞改革案を取り上げることにしたい。CGEは、1942年7月1日にレジスタンス運動の指導者の一人ジャン・ムーランによって創設された委員会である。簡潔にその任務を説明するなら、ヴィシー政権統治下の自由地域における国内レジスタンスの連携を作り出し、シャルル・ド・ゴール率いる自由フランスの下に統合することとなるだろう。CGEの活動はもとより、この組織と自由フランスおよび国内レジスタンス諸団体との関係はきわめて複雑であり、それらを詳細に論じることはしない³。本稿では、このCGEという組織が「情報」部門をどのように捉えていたのかを先行研究の整理を通じて検討する。そのうえで、占領下のフランスにおけるレジスタンス運動と新聞改革に関する研究の論点を提示したい。

2 ゲイの生涯については、以下を参照。Jean-Michel Cadiot, *Francisque Gay et les démocrates d'inspiration chrétienne 1885-1963*, Paris, Éditions Salvator, 2006. また、以下の『労働運動・社会運動人物事典』のサイトも参照。André Caudron, « Francisque Gay, Désiré, Olivier », *Dictionnaire biographique, mouvement ouvrier, mouvement social*. <https://maitron.fr/spip.php?article50134>, notice GAY Francisque, Désiré, Olivier par André Caudron, version mise en ligne le 8 mai 2009, dernière modification le 3 juillet 2009（2021年1月31日確認）。

3 こうした国内レジスタンスや自由フランスの関係の複雑さは以下の著作からも理解できるだろう。渡辺和行『ドゴールと自由フランス——主権回復のレジスタンス』昭和堂、2017年。

一. CGEの情報部門への関与

CGEの活動に関する先行研究として真っ先に挙げるべき著作は、ディアヌ・ド・ベルシズ『レジスタンスの9賢人—地下運動における総合検討委員会⁴』である。同書は、1979年に出版されたものだが、多くの一次史料を通じて、CGEの9人のメンバー（フランソワ・ド・マントン、ポール・バステッド、ロベール・ラコスト、アレクサンドル・パロディ、ピエール＝アンリ・ティジャン、ルネ・クールタン、ミシェル・ドブレ、ジャック・シャルパンティエ、ピエール・ルフォーシュ）を中心に、この組織の活動と展開を分析している。今日でも同書はCGEに関するもっとも詳細な分析を行った研究の一つとして考えられる。『レジスタンスの9賢人』でも、CGEが情報部門の改革にどのように取り組んだかが描かれているので、多少の言葉を補足しながら、以下に要約しておきたい⁵。

ベルシズによると改革の議論は三点に集約される。すなわち、対独協力に加担した新聞・雑誌の発行停止、新しい新聞・雑誌の創刊、それらの法的身分の作成である。レジスタンス運動の方針の軸として、従来の新聞やその制度を白紙にする一方で、「第四の権力」(quatrième pouvoir)たる新聞・雑誌に再び以前の悪しき状況に陥らないようにすることが求められた。ここでいう悪しき状況とは、上述のとおり、金銭権力との癒着のことである。

そして、国内レジスタンスの三つの集団がこの問題に取り組んだ。第一は、CGEの枠組みで、パロディを中心に専門家で構成された集団である。ここには、ジャン・ギニューベール、フランシスク・ゲイ、ロジェ・マシップ、ジャン＝マリー・エルマン、イヴ・グロリシャール、パスカル・ピア、レオン・ロラン、ルイ・テルノワールがいた。第二の集団は、レジスタンス中央委員会(Comité central des mouvements de Résistance)によって設置されたレジスタンス新聞委員会(Commission de la presse clandestine)である⁶。同委員会にはアルベール・ベイエを中心にレジスタンス運動諸団体から代表者が送り込まれた。具体的には、パスカル・ピア、ジャン＝ダニエル・ジュ

4 Diane de Bellecize, *Les neuf sages de la Résistance. Le Comité général d'études dans la clandestinité*, Paris, Plon, 1979.

5 ここでの記述は基本的に、以下を参照。*Ibid.*, pp. 178-185.

6 レジスタンス中央委員会は、1943年に創設された委員会である。この年、レジスタンス運動を統一するにあたって創設された多数の委員会のうちの一つである。

Claire Andrieu, « Comité central des mouvements de Résistance », François Marcot (dir.), *Dictionnaire historique de la Résistance*, Paris, Robert Laffont, 2006, p. 174.

ルジャンセン、エミリアン・アモリー、クロード・ベランジェ、リガル、ジャン・テクシエが集まった。第三は、全国抵抗評議会（Comité national de la Résistance、以下CNRと略記）内に設置された委員会、パスカル・コポーやジョルジュ・アルトマンの尽力があったが、大きな影響力をもつことはなかった。したがって、実質的には、CGEの枠組みで設置された集団とレジスタンス新聞委員会という二つの集団が存在し、両者が対立することになった。CGE側は、この対立を激化させないためにもゲイではなくパロディを代表者に据えた。

改革の議論に関していうと、対独協力に加盟した新聞・雑誌の発行停止、すなわち制裁をめぐる、国内レジスタンスとフランス国民解放委員会（Comité française de la libération nationale、以下CFLNと略記）のあいだで対立が生じた。前者が対独協力に加盟した新聞やその関係者にできるだけ厳しい制裁をくわえようとしたことがその理由である。制裁以上に問題になったのは、解放後、新しい新聞・雑誌の創刊をいかなる条件で許可するかであった。ベルシズの説明では、ロランが自由主義的な新聞・雑誌のあり方を模索したのに対して、バイエはレジスタンスの各党派が一紙ずつ所有するという極端な考えをもっていたという。バイエは、そうすることで新聞が統制され、戦前にみられたような経済団体への依存あるいは金銭権力との癒着を断ち切れると考えたのである。この辺りの考え方は、それぞれの本来の職業が何であるかなども関係しているだろう。出版界やプレス界で働く者たちは、出版の自由を最優先に考えるのは当然であった。つまり、ロランは、ジャーナリストであり、その観点から自由主義的な新聞・雑誌の創刊を主張したが、しかし、学者のバイエからすればそれは戦前の新聞界の腐敗に与する考えであるようにみえた⁷。結局、ロランの主張は受け入れられず、彼が情報事務官（commissaire à l'Information）の地位に就くという案は退けられ、その代わりとしてピエール＝アンリ・ティジャンが選出された。

そして、1944年5月2日、解放後の詳細な規定が完成し、それが数週間後には通達のかたちをとることになった。この通達こそが「カイエ・ブルー」であり、CGEのグループは、プレス項目を起草することになった。「カイエ・ブルー」は、解放時のパリや地方でとるべき情報部門に関する措置を関連当局に知らしめるものであった。

以上がベルシズのCGEが情報部門の改革に関する記述の要約であるが、レジスタンス運動の一環として「カイエ・ブルー」が起草される過程については、先行研究と

7 レオン・ロランについてはまとまった情報が少ないが、さしあたり以下を参照。Maurice Kriegel-Valrimont et Olivier Biffaud, *Mémoires rebelles*, Paris, Odile Jacob, 1999, p. 38.

の関連からしても説得的な内容である⁸。とはいえ、ベルシズは、CGEの活動全体を描くことに力点があり、情報分野の再建を軸に分析を進めているわけではない。また、ベルシズは、同分野でゲイが果たした役割を強調するが、具体的な動きや関係は明らかにしておらず、この点はより詳細な分析をする余地が残されている⁹。

二. CGEの目的とメンバー構成

ディアヌ・ド・ベルシズ『レジスタンスの9賢人』に次いで取り上げたいのが、ローラン・デュセルの論文「粛清に直面するCGE (Le CGE face à l'épuration)¹⁰」である。デュセルはフランソワ・ド・マントンの伝記を著した歴史家で、彼の中心的関心はフランスにおけるキリスト教民主主義の変遷にある¹¹。マントンはジャン・ムーランとともにCGEを創設した人物でもあり、こうした論文が公表されるのは必然的であるといえる。本稿にとって、同論文が重要なのは、そのなかで人的な側面における解放後の情報省の構想が分析されているからである。その内容を把握する前に、上記と重複する部分もあるが、ここで簡潔にCGEの機能と役割を整理しておきたい。

CGEは、1942年6月にムーランの提案で専門家委員会 (Comité des Experts) としてリヨンで発足した組織であり、1943年2月にCGEに改組され、同年の春にパリに拠点が移された。レジスタンス史の専門家ジャン＝フランソワ・ミュラシオルの説明によれば、専門家委員会は、レジスタンス運動と連携して問題点を検討し、その解決策をロンドンのシャルル・ド・ゴールに伝えることを使命としていた。そして、CGEになってからは、とくにド・ゴールの政府代表に直結して、解放、粛清から国有化、国家の改革の問題の検討を任されたという。だが、専門家委員会とCGEは基本的には同じ組織であり、当初からの目的も基本的な路線は同一である（ここでは混乱を避

8 たとえば、以下を参照。Marc Martin, *Médias et journalistes de la République*, Paris, Odile Jacob, 1997, pp. 273-276; Olivier Wieviorka, *Une certaine idée de la Résistance. Défense de la France 1940-1949*, Paris, Seuil, 1995, pp. 353-355.

9 『レジスタンスの9賢人』に付された注から推察するに、ベルシズはCGEの新聞に関する改革案もかなりの程度、把握していたように思われる。

10 Laurent Ducerf, « Le CGE face à l'épuration », Jacqueline Sainclivier et Christian Bougeard (dir.), *La Résistance et les Français. Enjeux stratégiques et environnement social*, Rennes, Presses universitaires de Rennes, 1995, pp. 259-271. 以下のデュセルの論文に関する記述は断りのないかぎり、この論文を参照。

11 Laurent Ducerf, *François de Menthon. Une catholique au service de la République*, Paris, Les éditions du Cerf, 2006.

けるために一貫してCGEと表記している)。おそらく、CGEが設立されて間もない時期に規定された文書では次のように規定されている。

- (1) ド・ゴール將軍の政府がとるべき最初の方策を計画し、提案すること。
- (2) 政治的かつ行政的職務を担うことができる多様な人物たちを提案すること。
- (3) ド・ゴール將軍の政府による将来の政治の概要を作成すること¹²。

端的に言えば、フランスの解放直後に滞りなくド・ゴール將軍が政府を樹立し、運営できるように、CGEが政策から人員の提案まで事前準備を求められたということである。

自由フランスのパッシー大佐によれば、ムーランとしては、CGEには解放時の臨時政府の顧問役になることを求め、さらにこの組織を高級官僚や政府のために尽くせる者たちを養成する場にしたいかったという。ド・ゴールが勝利を取めたあとすぐに高級カードルを配置できるように準備しようとしたのである¹³。こうした理念をもとに、CGEは、具体的には上記のような目的を達成しようとしていたことになる。

話を戻して、デュセールの論文であるが、この歴史家が検討をくわえようとしているのは、CGEの目的のうち、(2)の「政治的かつ行政的職務を担うことができる多様な人物たちを提案すること」についてである。すなわち、デュセールは、実際のところCGEが提案した人物たちは多様であったかどうかを確認しようとしている。そして、この作業に研究意義が認められるのは、次のような背景があるからである。

そもそもCGEは創設時から国内レジスタンスの諸団体から非難を受けていた。ミュラシオルの言葉を借りれば、「CGEほど攻撃の対象となったレジスタンス関係の組織は少ない。南部地域の運動体はこの委員会はフランス本国のレジスタンスに関する問題検討の中心となるべきなのに、次第にロンドンへの従属を強めていったと非難している¹⁴」ということである。実際、南部地域最大のレジスタンス組織コンバ(Combat)を率いるアンリ・フレネは、CGEが国内レジスタンスと距離ができていることを非

12 « Note n° 1 pour les Comités régionaux d'études », Fonds François de Menthon, Archives départementales de la Haute-Savoie, 135 J 68.

13 この点はベルシーズがパッシー大佐の記録から論じている。Diane de Bellescize, *Les neuf sages de la Résistance*, op. cit., p. 53.

14 Jean-François Muracciole, *Histoire de la Résistance en France*, Paris, Presses universitaires de France, 2004, coll. « Que sais-je? », p. 107 (J=F・ミュラシオル『フランス・レジスタンス史』福本直之訳、白水社、136頁)。

難した。これに対してはマントンがはっきりと反論している。CGEのメンバーの一人ピエール＝アンリ・ティジャンが自伝のなかでマントンの手紙を紹介している。

ルフェーヴル〔アンリ・フレネのこと〕が提起した、CGEとレジスタンスの諸運動のあいだの結びつきという問題の本質についていえば、こうした両者のまじり合いが不可欠であることには全員同程度に納得している。また、レジスタンスの諸運動こそが、今日行っている計画の作成についても、来るべき権力の奪取についても、主要な役割を果たすことが求められていることに納得している。CGEとレジスタンスの諸運動のあいだのまじり合いは次のようなかたちで実現されている。

1. CGEの代表 (secrétaire général) はレジスタンス運動の指導者の一人であること。
2. CGEのすべての計画は、判断を求めて、レジスタンス運動の調整委員会に提出されること。
3. いかなる計画も調整委員会との事前の協議なくCGEが最終的に採用することはない。意見の相違が残ったときは、CGEの見解と調整委員会の見解、両者がロンドンに送られることになる¹⁵。

くわえて、マントンはコンバとCGEのあいだには、とくに親密な関係が築かれていることを主張する——「というのも、私自身がCGEの創設者であると同時に、コンバの執行部 (comité directeur) のメンバーでもあると同時に政治研究を担ってまいります¹⁶」。

こうしてマントンは、CGEと国内レジスタンスの距離という問題についてはフレネに真っ向から反論した。しかし、フレネは、CGEの構成が職業や党派性において偏りがあることにも不満をもっていた。職業の偏りというのは、法律を専門とする大学人が多いということだ。マントン自身はナンシー大学の法学教授、ポール・バステイドがディジョン大学の法学教授、ティジャンがレンヌ大学で法学教授、ルネ・クールタンがモンペリエ大学の経済学教授であった。また、アレクサンドル・パロディとミシェル・ドブレが国务院の出身であった。ジャック・シャルパンティエが弁護士会

15 Pierre-Henri Teitgen, *Faites entrer les témoins. 1940-1958 de la Résistance à la V^e République*, Rennes, Ouest-France, 1988, p. 74.〔 〕は引用者による補足。

16 *Ibid.*, pp. 74-75.

会長、ルフォーシュは元々北部鉄道の幹部であったが、法学の博士号を取得している。ロベール・ラコストは財務省官僚で、労働総同盟（Confédération générale du travail）の熱心な活動家であった¹⁷。こうしてみると、組織全体としては、大学人や官僚を含めて法律の専門家が多いのは事実であった。

また、党派性による偏りはどうだろうか。ミュラシオルは、フレネやクロード・ブールデといった国内レジスタンスの指導者たちは、CGEが、解放後のキリスト教民主主義政党（人民共和運動（Mouvement républicain populaire））の形成の温床となったと批判している¹⁸。ただ、メンバーの一人ひとりを確認すると、マントンとティジャンだけがキリスト教民主主義者で、ほかの7人はそうではない。バステッドは急進党员、ラコストは社会党员である。ベルシーズによれば、クールタンとパロディは明言していないが、自由主義的な共和主義者、ルフォーシュは戦後、社会党に寄ったという¹⁹。ドブレは、戦後はド・ゴールの政党に参加するが、戦前は際立った党派性を示してしておらず、少なくともキリスト教民主主義の潮流に位置するわけではない。こうした理由から、デュセールは、CGEの党派性が偏って、公平性を欠いているという批判については当たらないとする。デュセールの主張では、党派性というCGEに批判が寄せられた最大の原因は、メンバーのなかに一人も共産党员がいなかったことが原因であると推測している。

三. 情報・プロパガンダ省の役職任命リストの分析

以上のようにデュセールはCGEのメンバーの属性から党派的な均質性に対する批判を退け、さらに分析を進めようとする。そこでデュセールは、CGEが1943年秋に作成した解放後の「情報・プロパガンダ省」（Ministère de l'information et de la propagande）（解放後は「情報省」となる）における役職リストに注目し、そこで挙げられた人物たちの属性を通じて、CGEの公平性を検証しようとする（本論文の末尾に付した資料を参照）。

デュセールが、第一に指摘するのは、メンバーの選択にまったく公平性がないということである。結論からいうと、メンバーのほとんど全員がキリスト教民主主義者なのである。例外はアンドレ・ステイビオとルイ・メルランだけであったという。ステイ

17 ベルシーズがCGEのメンバー全員の簡潔なプロフィールを作成している。Diane de Bellescize, *Les neuf sages de la Résistance*, op. cit., pp. 134-135.

18 Jean-François Muracciole, *Histoire de la Résistance en France*, op. cit., p. 107（邦訳：136頁）。

19 Diane de Bellescize, *Les neuf sages de la Résistance*, op. cit., pp. 134-135.

ビオはもともとコレージュ・サント・バルブの文学教師からジャーナリストになった人物、そして、メルランはジャーナリストで、国営ラジオ放送局 (radiodiffusion nationale) で務めていた人物であるが、両者ともにキリスト教民主主義の潮流には属していなかった²⁰。

ポール・シモン、エルネスト・ペゼ、ロベール・ビュロンは中道右派寄りのキリスト教民主主義政党である人民民主党 (Parti démocrate populaire、以下PDPと略記) の党员であった²¹。ジャン・サンニエ、ピエール・モロー、ピエール・コルヴァル、ロジェ・ラルドノワはもう一つのキリスト教民主主義政党、青年共和国 (Jeune République) のメンバーであった²²。フランシスク・ゲイ、アルフレッド・ミシュラン、アルフォン・ジュジュ、ジョルジュ・ウールダン、ルイ・テールノワールは、PDPと青年共和国とにかかわらず、キリスト教民主主義者であり、その潮流と深い関係にあるジャーナリストとして活動していた。そして、エミリアン・アモリーに関していうと、彼は総合広告局 (Office de publicité générale) の創設者であり、さまざまなキリスト教民主主義系の出版物の広告を主導的に作成したことが知られている。その代表的な刊行物の一つがPDP系の雑誌『ル・プティ・デモクラット (Le Petit Démocrate)』であった。このように情報・プロパガンダ省の役職リストに掲載された人物たちを、その政治的屬性から考慮したうえで、デュセールは、リスト自体はキリスト教民主主義の色合いが強いことを認めている。

しかしながら、第二の分析として、デュセールは役職リストの面々は、CGEが党派性を基に結集させたわけではないと指摘する。そうではなく、彼らは、そもそもアモリーの下に集まっていた者たちであるという。アモリーは、地下出版に際して印刷に特化したレジスタンス組織、「リール通りの集団」(Groupe de la rue de Lille) を率いていた²³。つまり、「リール通りの集団」に集った面々が、情報・プロパガンダ省

20 アラン・スティビオは、地方で教員をした後、パリのコレージュ・サント・バルブで教鞭を執り、そしてジャーナリストになったという。スティビオが亡くなったとき、以下に簡潔な経歴が掲載されている。「Notes et Nouvelles », *Revue du Nord*, tome 52, n° 206, juillet-septembre 1970, p. 437.

21 PDPに関する詳細は以下を参照。Jean-Claude Delbreil, *Centrisme et démocratie-chrétienne en France. Le Parti démocrate populaire des origines au M.R.P. 1919-1944*, Paris, Publications de la Sorbonne, 1990.

22 青年共和国については以下の論集を参照。Jacques-Olivier Boudon (dir.), *La Jeune République 1912 - à nos jours. Histoire et influence*, Paris, Honoré Champion, 2017.

23 Guy Vade pied, Émilien Amaury, *La véritable histoire d'un patron de presse du XX^e siècle*, Paris, Le cherche midi, 2009, pp. 149-168.

のリストに名を連ねているというわけである。ステイビオとメルランという非キリスト教民主主義者がリストにあがっているのはこうした背景があるという。そうして、デュセールは、役職リストと「リール通りの集団」とのあいだにある共通点は、キリスト教民主主義者であることというよりも、レジスタンス運動への参加とジャーナリズムに関して高い専門性を備えていることであったと結論づけている。別言すれば、CGEは、「リール通りの集団」に属する者たちが、二つの条件を満たしており、情報・プロパガンダ省の役職者として、解放後すぐに新聞改革を行うのに最適であると判断したということになる。また、デュセールは、「リール通りの集団」とCGEの結節点になったのがゲイの存在であったとする。事実、ゲイの人的ネットワークを通じて、CGEはガランシエール通りにあるブルー・エ・ゲイの事務所を利用して、新聞の改革案を作成していったのである。

第三は補足的であるが、デュセールは、1943年末にマントンがアルジェのCFLNに合流したことで、CGEにおけるキリスト教民主主義の影響力は低下したと述べる。たしかに、その後、キリスト教民主主義の潮流にいるジョルジュ・ビドーが、CNRの議長として、CGEと連携をとり、解放後の各省庁の役職任命の整備を行った。デュセールの推測では、情報・プロパガンダ省の役職に「リール通りの集団」の面々をもってきたのはビドーであるとしている。また、それも基本的にCFLNの承認が必要であるうえに、CGEは自分たちの考えを通すことなどできるはずなかったという²⁴。しかし、パロディがCFLNの占領地域の代表となったことで、その後は、むしろCGEの役割の重要性が高まることになった。そして、結果的にCGEは、解放後の各省庁の役職任命において、誰が大臣職に適任であるかを熟知している機関となった。だが、ムーランの強い反対によって共産党員を外したため、その埋め合わせとして、アモリーのような専門家をくわえる必要が出てきた。また、CGEの仕事はあくまで解放直後の臨時政府に関する人材の提案に過ぎず、その臨時政府も可能なかぎり短期で終えることを主張していた。かくしてCGEは選挙を通じた政府の樹立を目指して選挙を組織するように腐心したのである。結局のところ、デュセールの見解では、CGEは専門家を見極めるといふ、この組織に求められている仕事をしたのであって、役職任命のリストについてはあくまで公平性を確保しようとしたということである。

24 また、1943年12月に「リベラシオン・シュド」(Libération-sud)の指導者エマニュエル・ダスティエが、CGEがCFLNを経由せず時期尚早にリストを作成するなど越権行為を行っているという疑いをかけて批判したとされる。Laurent Ducerf, « Le CGE face à l'épuration », *op. cit.*, p. 263.

おわりに

以上のように、ディアヌ・ド・ベルシズとローラン・デュセールの先行研究を通じて、CGEによる情報部門の改革の一端を概観してきた。繰り返すと、両者ともに、本稿が軸にしているような情報秩序の再構築という問題関心でCGEの活動を捉えているわけではない。しかし、これらの先行研究は示唆するところが多く、そこからいくつかの論点を提示することができる。

第一は、CGEが解放後の情報・プロパガンダ省に関する構想をもっていたという点である。本稿で確認したのは、CGEによる同省の役職任命をめぐる提案に過ぎない。しかし、ここまで踏み込んだ提案をしている以上、CGEは、ある程度、戦後の情報政策に関するアイデアを練っていたと考えてよいだろう。これはデュセールが明らかにした重要な論点である。

第二は、CGEの公平性をめぐる点である。デュセールは、情報・プロパガンダ省の役職任命リストを分析して、CGEはキリスト教民主主義者であるかどうかという観点を軸にその面々を選んだわけではなく、したがってこの組織はやはり公平性を保っていたという。しかしながら、この証明には疑問が残るといわざるをえない。まず、仮にもCGEのメンバーの政治的・社会的経歴を考慮して、イデオロギー的な観点で公平性が担保されているとしても、情報・プロパガンダ省の役職任命リストの一覧からそれを引き出すのは難しいだろう。デュセールの論理は、CGEはそもそもキリスト教民主主義者を集めようとしたわけではなく、エミリアン・アモリーの率いる「リアル通りの集団」を中心に役職者を構成した結果としてキリスト教民主主義者が多く含まれることになったというものだ。しかしながら、CGEが、情報・プロパガンダ省の役職任命の提案をするにあたって、それこそこの組織の創設の目的に沿って多様な人物を提案すべくそれぞれの経験や専門性を精査したのだとすれば、リストに挙がった者たちのほとんどがキリスト教民主主義の潮流に属していることは明らかであったはずである。

こうした点は、それぞれの職業経歴をみるだけで十分である。一例を挙げると、フランシスク・ゲイである。ゲイは、社会的カトリシズムを主導したマルク・サンニエに強い影響を受け、シヨンや青年共和国同盟に積極的に参加したことが知られている²⁵。「はじめに」でもふれたように、ゲイの出版活動やジャーナリズム活動は基本的

25 シヨンの運動については以下を参照。伊達聖伸「「2つのフランスの争い」のなかの社会的カトリシズム—マルク・サンニエ「シヨン」の軌跡1894～1910」、『上智ヨーロッパ研究』、2013年、

には社会的カトリシズムの思想を普及するためのものであったと考えてよい²⁶。プレシズがCGEの新聞改革案にはゲイが重要な役割を果たしたと指摘したのに対して、デュセールは情報・プロパガンダ省のリストに彼の名前があることを提示した。しかし、ゲイの出版業やジャーナリズム界での職業経歴を踏まえるなら、CGEは、彼をリストにくわえることで、そこにキリスト教民主主義的な性格が色濃く反映されることが不可避であることは明白だったはずである。そのほかにも、ジャン・サンニエはその名前からもわかるようにマルク・サンニエの息子であり、解放後、『ウエスト・フランス (*Ouest-France*)』の創刊に参加した。さらに、ポール・シモンもリスト上では『ルエスト・エクレール (*L'Ouest-Éclair*)』としか記されていないが、この新聞はブルターニュ地方を中心に販売されていたカトリック色の強い地方紙で、同紙と深い関係があった。また、役職リストとは離れるが、CNRのジョルジュ・ビドーは、戦前はゲイが編集長を務める『ローブ』のジャーナリストとして活躍していた²⁷。こうした事情を勘案したとき、結果的に情報・プロパガンダ省の役職任命リストの面々が、出版やジャーナリズムに精通したレジスタンス運動への参加者という基準で選出されたのだとしても、それならば、なぜこれほど政治的あるいはイデオロギー的に均質になったのかが示される必要があるだろう。ここから導き出される論点は、戦前、すなわち大戦間期にキリスト教民主主義あるいは社会的カトリシズムの流れを汲んだジャーナリズム界がどのように形成されていったのかという問いであろう。

第三は、CGEによる情報部門での粛清に関する議論である。「粛清に直面するCGE」のなかで、デュセールは、情報・プロパガンダ省の役職任命リストを分析したあと、粛清の対象となる聖職者のリストに考察の対象を移している。そして、粛清に関してはその権力を濫用したと主張している。ここでは聖職者の粛清に関しては議論しない。しかし、CGEは情報部門における粛清にも関心があったとみるべきではないだろうか。同部門の粛清と改革は表裏一体の関係であり、粛清の条件も構想していたと考えるべきである。実際、カイエ・ブルーには制裁として粛清に関する項目が多く見られるだけでなく、上でも確認したCGEの創設当初の文書においても「新聞・雑誌とラジオ」(*Presse et Radio*)の項目が立てられており、そこで次のように言及

23-42頁。

26 ゲイのジャーナリズムに関する研究成果として週刊誌『ラ・ヴィ・カトリック』に関しては以下を参照。Élisabeth Terrenoire, *Un combat d'avant-garde*. Francisque Gay et « La vie catholique », Paris, Bloud et Gay/Le Cerf, 1976. 日刊紙『ローブ』は以下を参照。Françoise Mayeur, *L'Aube. Étude d'un journal d'opinion (1932-1940)*, Paris, Armand Colin, 1966.

27 Jacques Dalloz, Georges Bidault. *Biographie politique*, Paris, L'Harmattan, 1993, pp. 32-39.

されている—「ヴィシー政府に協力的であった新聞・雑誌の、完全あるいは一時的な発行停止。人員や財産への制裁はまた別である²⁸」。この点については、『ルエスト・エクレール』と『ウエスト・フランス』の例が参考になるだろう。『ルエスト・エクレール』は占領下でも出版停止をせずに対独強力をしたという理由で粛清の対象となった。しかし、同紙のジャーナリストたちで、レジスタンス運動に参加した者たちが中心となって、家屋、設備、人員はほとんどそのまま、解放期に『ウエスト・フランス』を創刊するに至った²⁹。こうしたスムーズな移行が可能となった背景として考えられるのは、『ルエスト・エクレール』が粛清の対象となることが一部の者たちには早い段階で知らされていたということである。別言すれば、CGEが情報部門の改革を構想するにあたって、この部門での粛清についても検討していたはずで、その点も考察する余地が残されているだろう。

付記

本稿は2020年度南山大学パッヘ奨励金I-A-2の助成による研究成果の一部である。

28 « Note n° 1 pour les Comités régionaux d'études », Fonds François de Menthon, Archives départementales de la Haute-Savoie, 135 J 68.

29 中村督「キリスト教民主主義とジャーナリズムに関する一考察——『ウエスト・フランス』の創刊過程に着目して」、丸岡高弘、奥山倫明編『宗教と政治のインターフェイス—現代政教関係の諸相』行路社、2017年、109-132頁。

資料³⁰

情報・プロパガンダ省

省の事務局長：ロベール・ビュロン、ベルシャッス通り14番地、パリ7区（下内（現在、映画の職業組織委員会 Comité d'organisation professionnelle du Cinéma の事務局長））。

4部局：新聞・雑誌-出版-ラジオ-映画

フランシスク・ゲイ、編集者、ガランシエール通り3番地、パリ6区。

アルフレッド・ミシュラン、ジャーナリスト（現在はリモージュ）。

アルフォンス・ジュジュ、デブレスト通り13番地、ヴィシー。

ジョルジュ・ウールダン、ロザ・ボヌール通り5番地、パリ15区（現在、北部地域で、家族運動調整・行動全国センター Centre national de coordination et d'action des Mouvements familiaux）の事務局長。

ルイ・テルノワール、ジャーナリスト、ジャン・ヴェベール通り7番地、パリ20区。

ピエール・コルヴァル、ジャーナリスト、レンヌ通り110番地、パリ6区。

ピエール・モロー、元青年事務局都市青年センター長、現在は南部地域で地方家族プロパガンダを担当、ギャール通り、ラパリス（アリエ）

ロジェ・ラルドノワ、営業部門長、アルフォンス・ドーデ通り13番地、パリ14区。

新聞・雑誌部門：アンドレ・スティピオ、コレージュ・サント・パルプの文学教師、サン・ミシエル通り63番地、パリ5区（元『ロルドル』の国会担当記者。マンデル内閣、内務省の担当官を歴任）。

ラジオ部門：ルイ・メルラン（ラジオ番組制作者、ボンブ通り118番地、パリ16区）。

『ウエスト・エクレール』：ポール・シモン、フィニステールの議員、ギャール通り6番地の2、ランデルノー。この新聞の再組織化の責任を負うのにもっとも適任。

外国宣伝総局：

中央ヨーロッパおよびバルカン半島：エルネスト・ペゼ、モルビアン議員、ダンテ通り5番地、パリ5区（下院の外務委員会の副議長）。

宣伝技術局：局長：エミリアン・アモーリー、OPG〔総合広告局 Office de publicité générale のこと〕代表、リール通り37番地、パリ7区。

アヴァス広告代理店に対する政府委員長

エミリアン・アモーリー。

30 « Ministère de l'information et de la propagande », Fonds Marc Sangnier, Institut Marc Sangnier, MS 60. 筆者はこの史料をマルク・サンニエ研究所で閲覧した。この史料の注意書きに、それが1993年3月23日にローラン・デュセールによってマルク・サンニエ研究所に預けられたコピーであることが記されている。